

論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 第 1060 号	氏 名	下 平 浩 揮
論文審査担当者	主 査 角 谷 眞 澄 副 査 本 郷 一 博 ・ 栗 田 浩		
<p>(論文審査の結果の要旨)</p> <p>前十字靭帯再建術 (ACL reconstruction) において骨孔を解剖学的位置に作成することは、膝の安定性と良好な治療成績を生む上で重要である。解剖学的な位置に再現性をもって骨孔を作成するためには術中に確認が可能な landmark が必要であるが、脛骨側については標準的な landmark は未だに確立されていない。また脛骨側は陳旧例でも ACL の遺残組織であるレムナントが残っていることがほとんどであり、近年ではレムナントを温存した再建術も報告されてきていることから、今後はレムナントを温存した状態でも確認可能な landmark を用いた骨孔作成法が理想的である。先行研究にて、ACL 脛骨付着部は 6 つの anatomical landmark (前方-Parsons' knob、内側-medial intercondylar ridge、前内側-L-shaped ridge、外側-anterior horn of lateral meniscus、後方-anterior borders of the medial and lateral intercondylar tubercles) で囲まれる狭い範囲内に存在することを明らかにした。下平らは、6 つの anatomical landmark が鏡視下にレムナントを温存した状態でも十分に確認できるかどうかを検討し、これらの landmark を指標とする脛骨骨孔作成が個体間のばらつきが少なく再現性があるかどうかを検討した。</p> <p>その結果、下平は次の結論を得た。</p> <ol style="list-style-type: none">6 つの anatomical landmark は鏡視下にレムナントを温存した状態でも十分に確認が可能であった。これらの landmark を指標に作成した骨孔位置は、レムナントを切除して ACL footprint を指標に作成した骨孔位置と比較して平均値に差はなかったが、ばらつきは有意に少なかった。6 つの anatomical landmark を指標に作成した骨孔位置は、ACL 脛骨付着部内のより前内側に位置しており、これは半月板前角損傷のリスクを下げ、膝の安定性に繋がる理想的な位置であった。 <p>今回の結果から、6 つの anatomical landmark を用いた脛骨骨孔作成法は、レムナントを温存した状態でも理想的な位置に再現性をもって骨孔が作成できる、有用な作成法であると思われた。</p> <p>主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。</p>			